

## 東京大学徘徊記〜編集部吟行会

平本妙子

今年も七月に豪雨による大きな被害がもたらされた。激甚災害に指定され、今も普段の暮しに戻れない方々にお見舞いの言葉も見つからない。どうか体調を崩されないようにと祈るばかりだ。

七月十六日、都内で少し趣の変った吟行をと編集部一同で東京大学を訪ねた。赤門前で待ち合わせたのが日陰でもひっきりなしに汗が滲んで来る。

赤門の碑文読みつつ片陰に 康代

正式名称は旧加賀屋敷御守殿門と言い、文政十年（一八二七）建立の国の重要文化財だ。門の前で記念写真を撮って行く人も多い。

門を入れてすぐ右手奥に大学総合研究博物館がある。十四日からの特別展「珠玉の昆虫標本」を見学した。入場は無料。約二百年前、江戸時代に製作された日本最古の昆虫標本から明治、大正、昭和の貴重なコレクション等四万点が展示されている。中でも江戸末期の旗本で博物学者の武蔵石寿の標本

は異彩を放つ。他の標本が展翅されピンで止められているのに対して、これは真綿の上に昆虫等を載せ半球型のガラスを被せ、厚紙和紙の台に糊付け密封してあるという独創的なものだ。昆虫標本は湿気、害虫、黴に弱く、特に虫の害を受け易い。それが二百年近くを無事に経過して今ここにあるのは奇跡的だという。石



また、一九三〇年代の発見以降八十年近く見つからなかった「幻の蝶」ブータンシボリアゲハの標本は、東日本大震災からの復興を願ってブータン国王から寄贈されたもので、現地以外ではここで見られないとの事。その他、蝶や蛾、セミ、トンボはもとよりゲンゴロウやアリ等々、様々な昆虫標本が天上近くまでぎっしりと展示されている。

すこしづつ重ね夏蝶すだれ貼り 正美  
擬態せし蛾の冷笑のまま展翅  
まひるの星空か展翅のピン涼し  
冷房オン標本一気に擬態せり 至

香水や指輪にしたき源五郎 喜美子

ブータン国王恩賜展示の蝶涼し 康代

炎天にリュックとりどりオープンラボ 文子

蟻標本より炎昼の日の匂ひ 妙子

他にも**別室にはゾウやカバ**、縄文人の骨等もあり、通路から研究室が覗けるオープンラボ式の博物館である。ボランティアガイドの方が何人かおられ、熱心に説明して下さる。親御さんと一緒に訪れた少年が目を輝かせ、ガラスに張り付くようにして蝶をみていた。

河馬の頭骨ミルキーウェイ想ふ 正美

骨にして象の巨頭は冷房吸ふ

冷房オフウシ目骨の凝りほぐす 至

夏シャツの玻璃のかんばせ縄文貌 喜美子

冷房や川瀬天上より吊られ 文子

展示の量に圧倒され長居して身体が冷えてきたので外へ。

アルパカを抱きしめたくて冷房裡 喜美子

マスク

蛾の仮面で女装完璧木下闇 至

三四郎池のけだるき鯉やこの暑さ 康代

溽暑という季語がぴったりのこの日、三四郎池を訪れたのは補虫網の親子と私達六人のみ。ひっそりとした池は亀も甲

羅干しする気分にはなれないようだった。

学食のおふくろメニュー胡瓜もみ 康代

日盛りの講堂息を潜めをり 文子

生協の中央食堂で昼食を済ませ安田講堂や工学部、法学部等の建物を見学。安田講堂や法文一号館、二号館の古代ギリシャ風彫刻が施されたアーケードのあるレンガ造りの建物は、関東大震災によって大部分が倒壊した校舎の復興計画を中心になって立案した内田祥三（当時の工学部教授、後の総長）の設計で「内田ゴシック」と呼ばれ、重厚で勉学も捗りそうだ。広々としたキャンパスは樟や櫟もののびと枝を伸ばし、大木の銀杏並木、木陰の広場には、そこそこにベンチがあり暑さを忘れて、ゆったりとした時間の流れを感じさせてくれる。

日傘くるり赤門までの青春期 至

緑陰の中へ未来の昆虫博士 妙子

初めて訪れた東京大学、急ぎ足の一巡り。日の照りつけるベンチに取り残されていたぬいぐるみは救出されたろうか。

東大の探訪日焼度数は五 至

東京大学しらみつぶしに日傘さす 喜美子

猛暑日に破裂しさうなぬひぐるみ 妙子

蝶の標本に釘付けになっていたあの少年は、将来その専門家になっているであろうか。